

0. 石禅師関連人物略図

1. 離れの一室にかかる、新井石禅師の詩

- (1) 心は大山の如く 量は大海の如く
- (2) 「八風(はっふう)」とは
- (3) 人生を夢と観すれば 悲しみもなく 苦しみもなし
- (4) 萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ
- (5) 般若心経のなかの「色即是空」、良寛の「死ぬ時節には死ぬがよく候」

2. 八風と三毒

- (1) 八風は、龍樹の『大智度論』に示される教え
- (2) 三毒
- (3) 抑える、制御する

3. 石禅師とサフラン酒、略歴

- (1) 石禅師と雲洞庵
- (2) 石禅師と定正院
- (3) 駒形家と堅正寺

4. 南魚沼の雲洞庵

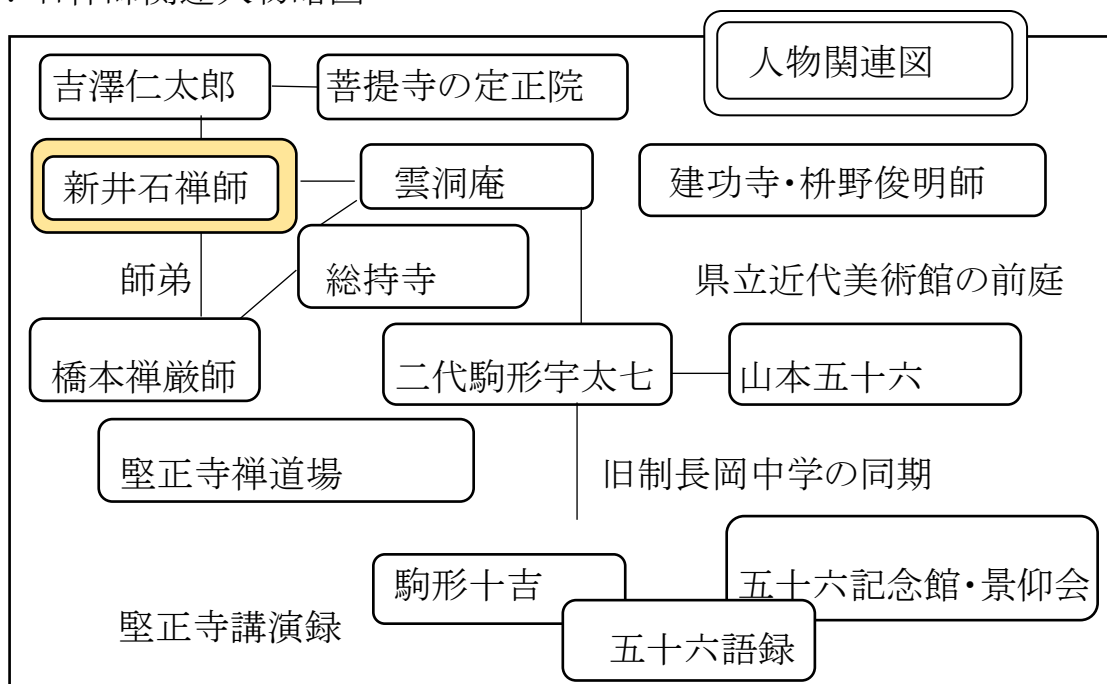
5. 横浜鶴見の曹洞宗大本山・総持寺と本山近門寺院・建功寺

- (1) 建功寺と総持寺との関わり
- (2) 建功寺住職の枡野俊明師
- (3) 庭園デザイナー枡野俊明さんと県立近代美術館の縁

6. 摂田屋近く、鷺巣の定正院

補足 残った山本五十六「語録」
石禅師関連人物図

0. 石禅師関連人物略図



1. 離れの一室にかかる、新井石禅師の詩 (春日の解釈です)

石禅師が初代仁太郎に書いた詩だが、この詩は多く揮毫されており、石禅師の好きな言葉のようです。禅のみならず、仏教の根本の言葉と思います。

読み方は

心は大山の如く 八風を受けて動ぜず
量(かさ)は大海の如く 衆流(しゅうる)を容れて漏さず
人生を夢と観すれば 悲しみもなく 苦しみもなし
萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ
(実もあれ の あれ は阿連 のように見えます)

(1) 大山のような高く大きな心、大海のような広く深い心
出典は、「いわゆる大心とは、大山のような高く大きな心、大海のような広く深い心を持ち、一方に偏った考えをせず、ひとつの思いに固執することのない、おおらかな心を言います。」(典座教訓*1)

それは道元禅師が宋に渡り二人の典座和尚から学んだ融通無碍なる心。

すべての人にとっての修行の心であり、悟りの心であるのです。

*1「典座(てんぞ)」とは、禅寺において「食」を司る重責を担う役職名。典座の行うべき職責を、道元禅師が、非常に細かく丁寧にお説き下さった書物が『典座教訓』である。

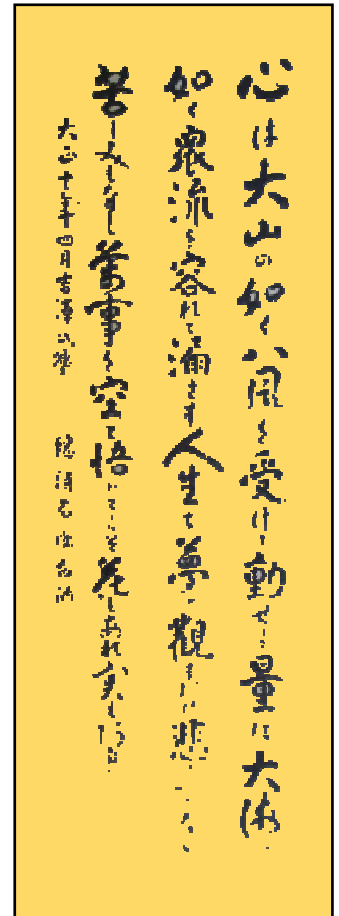
(2)「八風(はっふう)」とは
人を正常から異常へ、歓喜から絶望へ、善から悪へと誘う、八種類の風を言う。
「利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽」の風で、龍樹の『大智度論』に示される教えにある言葉です。

私たちが好む姿として、(四順)

利(うるおい) 目先の利欲にとらわれる姿
誉(ほまれ) 名聞名利にとらわれ、我を忘れた姿。
称(たたえ) 本人がいるところでほめられ、浮かれてしまう姿。
楽(たのしみ) 心身を喜ばすことに有頂天になる姿。

私たちが嫌う姿として、(四逆)

衰(おとろえ) 老衰や生活に破れた姿



毀（やぶれ） 他人に批判されて自己の信念を変えてしまう姿。

譏（そしり） 本人がいるところでそしられ、怒る姿。

苦（くるしみ） 心身を悩ますことに苦しむ姿。

これら愛憎の状態が人の心を動揺させ、惑乱を起こさせる。

好むこと・好まないことに執着する人間の性質がその因なのである。

賢人は八風と申して八つのかぜにをかされぬを賢人と申すなり。

利(うるおい)・衰(おとろえ)・毀(やぶれ)・誉(ほまれ)・称(たたえ)・

譏(そしり)・苦(くるしみ)・楽(たのしみ)なり。

御心は利あるに・喜ばず・劣えるに嘆かず等の事なり、

此の八風に犯されぬ人をば必ず天は守らせ給うなりし云々(日蓮)

(3) 人生を夢と観すれば 悲しみもなく 苦しきもなし

この部分の意味、真意を私は、まだ理解できておりません。いろいろな受け取り方がありそうですが、ただ、これがないと、次に続かないように思います。

わたしは、こんな受け取り方も、許されるかな、ということで、下記。

『あなたのこれまでの人生には、いろいろなことがあったことでしょう。

その中には、あなたにとって、うれしいことも多かったでしょうが、

良いことばかりでなく、辛いことも悲しいこともたくさんあったに違いない。

でもね。人の世は、このあとの後生の年月に比べたら、あっという間です。

また見方次第で、あれがよい、これが悪いなどということは、ないのです。

悲しみ、苦しむことは、ないのですよ。』

こう受け取ると、次の「萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ」を抵抗なく受け取れるように思います。

・・・ そうすると、この人の世を、「夢のように短い年月」と捉えられるか否か、がポイントになりそうです。

(4) 萬事を空と悟りてこそ 花もあれ実もあれ

空を「空っぽ」と捉える見方もあるようですが、ここでは「諸行無常」、絶対に変わらないということはない、絶対的に確かなものは何一つない、と捉える方が適切なように思います。要は、絶対というものはない。こだわりを捨てなさい、ということ、云っているのだと解釈したいと思います。

そして、「花もあれ実もあれ」とは、その先にこそ、人生を生きる意味もある、と諭しておられ、これは宗派によらず、仏教共通の姿勢のように受け取れます。

なにげない日常の中に、幸せを見出すことができるでしょう。その気持ちを大切に、一日一日を過ごしなさい、ということ、云っていると、受け取れるのです。

(5) 般若心経のなかの「色即是空」、良寛の「死ぬ時節には死ぬがよく候」

おなじみの般若心経のなかの「色即是空」の空も、この空と同じです。

「色即是空」は、この世の万物は形をもつが、その形は仮のもので、本質は空(くう)であり、不変のものではない。などと説明されることが多いです。しかしながら、どうも、このように、人生とかけ離れた言葉と考えがちですが、もっと積極的な意味に捉えるべきではないかと、思います。

誤解されがちな「諸行無常」と同様に、色即是空は、自分自身を含めた全ての物事は絶え間なく変化しており、自分自身ですら不変的なものはない。

ずっといいことばかりが続かないように、悪いことも続かない。悪いことがあっても、人生そういうものだと思って進めば、またいいことに巡り合えるはずだ。

最善を尽くすのが、本来の人としての道である。

このように考えると、良寛さんの「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。

死ぬ時節には死ぬがよく候。是ハ災難をのがるゝ妙法にて候。」と同じく、「色即是空」の言葉は、「人として生まれたからには、生老病死からは逃れることはできず、あるがままを受け入れ、その時その時に自分ができることを一生懸命やるしかない」という仏教の根本の教えの言葉であると、気付くのです。

2. 八風と三毒

(1) 八風は、龍樹の『大智度論』に示される教え

八風 「利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽」

・龍樹と、著作『大智度論』

龍樹は、大乘仏教中観派の祖。2世紀に生まれたインド仏教の僧である。親鸞は龍樹を「難易二道」を明らかにしたとして、七高僧の一人に挙げ、主著『教行信証』のなかの正信念仏偈に、龍樹の貢献を讃えている。『大智度論』は、古典『摩訶般若波羅蜜經』に対する、龍樹による膨大な注釈書である。漢訳は鳩摩羅什(402-405年)による。初期の仏教からインド中期仏教までの術語を詳説する形式になっており、仏教百科事典的に扱われることが多いという。

法華經にも、「法華經の一字は大地の如し、万物を出生す。一字は大海の如し、衆流を納む。一字は日月の如し、四天下をてらす。」とあるそうです。

(2) 三毒

この八風は、多くの經典にみられる言葉、三毒に通じるものだと思います。三毒とは、貪・瞋・癡(とん・じん・ち)を指し、煩惱を毒に例えたものであり、人間の諸悪・苦しみの根源とされています。

私どもは、順境に対して貪欲・愛を起こし、逆境に対して憎しみがちで、仏教において克服すべきものとされる最も根本的な三つの煩惱、つまり瞋恚を起こします。その根源には、自分の都合を絶対のものとする愚かさがあり、それが愚癡というものだ、と見抜きました。

自分の好むものをむさぼり求める貪欲、
自分の嫌いなものを憎み嫌悪する瞋恚、
ものごとに的確な判断が下せずに、迷い惑う愚痴の3つ

それらを貪欲・瞋恚・愚癡の三毒と呼び、このような「愛」と「憎しみ」、その根底にある自己中心的な考え方が、人間の底にある。

それを突き破っていく、そしてこの「愛」と「憎しみ」を超えていく、これが仏道というものなんですよ、と教えてくれます。

(3) 抑える、制御する

このように、仏教の本来の教えでは、八風、三毒や煩惱は、なくすと考えるのではなく、それらを抑え制御するものですよ、とっています。そして、この制御の方法、自分が乗り越える方法として、道元の只管打坐、法然・親鸞の専修念仏、などなど、様々な思想が出てきたとみることができます。

親鸞は、ここで、超えることは凡夫にはできないが、悲しむことはない、阿弥陀様にお任せしなさい、と諭してくれています。

しかし、どれがどう、ということはありません。信仰・信の領域であり、これ以上の言及は、ここでは控えます。

良寛の周囲の人々に接する態度にも通じる、無量寿経にある和顔愛語、先意承問、少欲知足も、この制御の方法の核心とも云えるものであり、簡潔に表現した生活規範だと思います。

3. 石禅師とサフラン酒、略歴

(1) 石禅師と雲洞庵

サフラン酒の離れの一階に、初代当主にあてた、新井石禅師の書幅があります。サフラン酒には魚沼からのゲストもおられますが、石禅師をご存知の方も多いです。雲洞庵に筆跡もいくつか残っています。

新井石禅師は、南魚沼市雲洞庵で方丈を勤め、永平寺の住職代理などを経て、大正9年(1920年)に曹洞宗第11代管長となった、大変な高僧です。曹洞宗一門の学校の仕組み、近代教学システムを確立された方としても、知られています。吉沢家の菩提寺が同じ曹洞宗の定正院ということで、当主と石禅師の交流があったのでしょうか、魚沼屈指の名刹、日本最大の庵寺、雲洞庵の話をするのも、いいと思います。

雲洞庵の十世に、北高全祝禅師という方がおられました。越後の国主上杉謙信、甲斐の国主武田信玄の禅の師でありまして、民百姓の迷惑を思い、ふたりに川中島で戦うよう図られたり、謙信公に塩を甲斐に送らせるよう指導したとのこと。川中島で何回も戦った理由として、一番合点がいく話です。

(2) 石禅師と定正院

サフラン酒の創業者・初代吉澤仁太郎の吉澤家の菩提寺は、撰田屋近く、鷺巣の曹洞宗寺院の定正院です。

その菩提寺が曹洞宗という縁で、新井石禅師と初代吉澤仁太郎が知り合って、この揮毫に至ったと思われます。

定正院の吉澤家のお墓のすぐ高くに、キツネの塑像があります。

竹駒稻荷のキツネと同じ作者と、ひと目でわかります。竹駒稻荷がサフラン酒の吉澤家、吉乃川の川上家がいっしょになって勧請したということを示す、ひとつの証しだと思います。

(3) 駒形家と堅正寺

山本五十六記念館の五十六の「やって見せ・・・」は、悠久山・堅正寺の講義録の中にあるとのこと。

堅正寺は、二代駒形宇太七の発願により、座禅道場として建立されたお寺です。初代の住職・橋本禅巖(ぜんがん)師は、禅巖師が雲洞庵に在職中に、二代宇太七がスカウトしました。橋本師は、兄弟子の石禅師が死去後、石禅師ゆかりの雲洞庵に、修行僧の指導役として住居していたのです。当時の住職に橋本師を紹介してもらって、スカウトとなったわけです。不思議な縁です。

宇太七は、寺の完成直後、まだ入仏式が行われる前に突然亡くなります。そして二代宇太七の弟、十吉氏が、宇太七がはじめた銀行経営と寺院護持の双方を継ぎます。

その後、十吉氏は銀行経営に力を発揮し、長岡経済界をリードする名経営者となるとともに、美術発掘にも多大な貢献をしていくことになります。そんな十吉氏のもと、堅正寺も、戦後は、社員研修にも使用されていたとのことで、人材育成の極意とされる山本五十六の、「やって見せ、説いて聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」、の言葉が堅正寺住職の講義録「正法眼蔵撰法之巻」にある由縁も、十分理解できます。

二代駒形宇太七と山本五十六は、戦前の長岡中学の同期で、親友であったそうで、住職と山本五十六は、ともに語り合うこともあったでしょう。そして、「堅正」という寺名は、初代宇太七の法名 からとったということ、別の書物から知りました。

ちなみに、堅正は、仏説無量寿経の中の偈文、讃仏偈にある言葉。(駒形家の菩提寺は浄土真宗。 浄土真宗の法名は、本人や先祖の名にゆかりの字、本人の人柄を表わす文字のほか、ご開山の親鸞聖人の著作・教行信証のなかの偈文・正信念佛偈、あるいは仏説無量寿経の中の偈文、讃仏偈や重誓偈にある言葉からとることが多い。)

新井石禅師、橋本禅巖師の師弟関係と縁

神奈川足柄・最乗寺で、新井石禅方丈と橋本禅巖は師弟となり、石禅師の総持寺入山に禅巖師も従った。石禅師の死後、禅巖師は新潟・雲洞庵で教師として修行していた時、スカウトに訪れた宇太七が紹介されたのが橋本禅巖師。堅正寺の縁、二代駒形宇太七急死により弟・十吉氏と、橋本禅巖師の縁、さらに二代駒形宇太七と山本五十六は、戦前の長岡中学の同期、そして五十六記念館・景仰会の初代会長が駒形十吉氏。不思議という言葉で片付けるには余りに不思議なことが重なる、本当にご縁としか言いようのないものです。(文末の「残った語録」)

新井 石禅(あらい せきぜん、1865年-1927年)

日本の曹洞宗の僧侶。総持寺独住5世、第11代管長(大陽真鑑禅師)。下記のような要職についており、曹洞宗の明治、大正期の指導者であった。明治12年(1879)38歳から翌年3月まで、

東京駒込の吉祥寺にあった曹洞宗専門学本校の学監。

曹洞宗大学林学監兼教授

宗務院教学部長

大正9年 総持寺管長

大正10年 北米に巡教、アメリカ大統領とも会談

4. 南魚沼の雲洞庵

南魚沼一帯にあたる、昔の呼び名で上田庄と呼ばれた地域に位置する、越後きっての古刹・名刹です。当寺の縁起などによれば、藤原房前の母が庵を結び開祖とする伝承をもち、養老元年(701年)房前が母の菩提を弔うため、尼寺を創建したとされています。

室町時代に至り直江津を本拠としていた関東管領の上杉憲実が永享元年(1430年)、寺伝によれば応永27年(1420年)に、越後ではじめての曹洞宗寺院である村上の耕雲寺住職である傑堂能勝の法嗣である顕窓慶字を招き、禅寺として再興したといわれています。

上田庄は山内上杉氏との関わりを持ち、山内上杉氏を継いだ憲実が雲洞庵再興を企図していた叔父にあたる上杉憲定の意思を継いで再興を行ったといわれています。

憲実が文安4年(1447年)に政治から退くと、雲洞庵に隠棲します。そののち、直末27寺を有する越後有数の大寺院に発展し、耕雲寺(村上市)、種月寺(新潟市)、慈光寺(五泉市)と共に、越後四箇之道場と称されました。後の上杉景勝、直江兼続が幼少期に通天存達師(第13世住職・上杉景勝の実父である長尾政景の兄)に学びました。

赤門からの参道の下には法華経の一石一字が書かれた石が埋められており古来より「雲洞庵の土踏んだか、関興寺の味噌嘗めたか」といわれ、参道を踏みしめて参詣することで御利益があるとされています。

関興寺(かんこうじ)は、新潟県南魚沼市上野にある臨済宗円覚寺派の寺院。応永17年(1410年)上杉憲顕の子、覚翁祖伝の開基。最初は、関興庵と称する。上田長尾氏や上杉氏の庇護を受け栄えました。一時、米沢移封について米沢にあったが、寛文年間、現在の地に移り、関興寺と改めて現在に至っています。

曹洞宗 越後往古四ヶ道場

慈光寺(五泉市) 国主・上杉憲実の帰依をうけ、四方に教線を拡張
雲洞庵(魚沼市)

種月寺(新潟市)しゅげつじ 開基は上杉房朝、中興開基は上杉謙信。

耕雲寺(村上市) 新潟県最初の曹洞宗の寺

中世より幕末にかけ関東、東北、北信越にまで直末80カ寺、孫末367カ寺を数えた。往時、七堂伽藍が建ち並び、100名余の雲水が修行していたが、明治19年に火災、鐘楼のみを残した。

<http://www.jikoji.jp/doujou.html>

長岡市北荷頃・曹源寺も、禅刹越後四ヶ道場のひとつとされるときがある。

<http://so-genji.jp/history/>

1465年頃 修行僧大龍音吉が長岡・乙吉の龍穩院を開いた高僧の公器賢章禅師を招き、草源寺を整備して萬年山曹源寺と改め開山。

5. 横浜鶴見の曹洞宗大本山・総持寺と本山近門寺院・建功寺

(1) 建功寺と総持寺との関わり

建功寺 横浜市鶴見区の山手側、馬場一丁目にある大寺院

大本山 福井県 大本山永平寺 御開山 高祖承陽大師(道元禅師)

横浜市 大本山總持寺 御開山 太祖常濟大師(瑩山禅師)

大本山總持寺と建功寺

建功寺 は永禄年間(1558～70)、小田原北条氏の家人で寺尾城主の諏訪三河守が、創建したと伝えられています。

本堂は宝暦7年(1757)建立。山林に囲まれた境内は約2500坪。

曹洞宗においては、福井にある大本山永平寺と横浜にある大本山總持寺とを両大本山と言います。

明治31年、当時石川県の能登にあった、永平寺とともに大本山であった和島・總持寺が不慮の火災にあい、伽藍のほとんどを焼失してしまいました。その後、本山再建会議で首都圏への移転の声がおこり、有力な候補地として鶴見の成願寺(建功寺の末寺)があがりました。

明治39年、能登の門前町より、鶴見への本山移転が正式に決定され、建功寺 の15世宏道和尚が本山移転に多大な尽力し、その功績により、明治40年、大本山總持寺貫首より、本山近門寺院に列せられ、永代色衣着用の寺格を特別に許されました。

(2) 建功寺住職の枅野俊明師

枅野俊明(しゅんみょう) 僧、作庭家。曹洞宗建功寺住職。横浜市生れ。

玉川大学農学部農学科卒業後、曹洞宗大本山總持寺僧堂で修業。

その後、造園設計会社の日本造園設計を設立。禅と日本庭園をテーマとした造園設計を行ない、国内外で高い評価を得た。

そのほか、ブリティッシュコロンビア大学特別教授、多摩美術大学環境デザイン学科教授などを務めた。

平成6年(1994年)、ブリティッシュコロンビア大学特別教授に就任

平成10年(1998年)、多摩美術大学環境デザイン学科教授に就任

平成13年(2001年)、建功寺第18世住職に就任

主な受賞にブリティッシュコロンビア大学特別功労賞、日本造園学会賞く

芸術選奨新人賞(美術部門)、カナダ政府カナダ総督褒章、

ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章ほか。

カナダ大使館東京、セルリアンタワー東急ホテル日本庭園、ほか。

(3) 庭園デザイナー枅野俊明さんと新潟県立近代美術館の縁

枅野俊明さんは、1993年開館した県立近代美術館の前庭を作庭しました。

枅野さんの話として、前庭のテーマは、「自然への回帰」とのこと。

開館から、もうじき30年になるが、前庭の幾何学的雰囲気から、後ろの屋外庭園に移る石畳の変化は、今もわかります。ただ、県の予算不足から、庭園の水路の水の循環が早々になくなったのは、少し残念。

6. 摂田屋近く、鷺巢の定正院

定正院は、摂田屋の辻地藏から「左は山」の道をそのまま村松方面に進んで、横枕のお福酒造の先、左の脇道を百段近く階段を登ったところにある、曹洞宗の古刹です。

鎌倉の関東管領山内上杉家の分家・扇谷家当主であった上杉定正、その家臣が戦いに敗れた定正の遺髪を奉じ、この地に草庵を作ったのが始めとされるお寺です。

神社、石の仏様を見ながら百段近い石段を登り切って、ようやく本堂が目に入ってくるという、まさに「葦酒山門に入るを許さず」という禅寺のたたずまいを、そのまま残す境内です。以前は、長岡屈指の美しい広大な日本庭園が公開されていましたが、その後の長い年月、豪雪や風雨で荒れはてたためでしょうか、最近は公開が中断されたままです。しかし近年、再び整備の手が入るようになり、裏手の墓地から遠く拝見しますと、年々その美しさを取り戻しつつあるように感じています。日本庭園以外にも、本堂のまでの間に、初春は石の階段脇のヒメアオキの常緑の葉と赤い実が成り、春は境内の脇のソメイヨシノに墓地内のヤマザクラが見事。数年前まで、夏は池にびっしりとハスの葉と随所にまっすぐ延びるピンクの花が咲きましたが、残念ながら枯れてしまったようです。

庭園拝観は、必ず方丈様に玄関でお声がけしてご相談下さい。

定正院の山側にはブナ林があり、細い道が通っています。その昔、鷺ノ巣城は、定正院境内と墓地一帯に築かれていたそうですが、その細道の内側が鷺の巣城の城郭とすれば、なかなか大きな城郭だったかも知れません。（直径300mほど）本堂の左に、見上げるような高さの墓所があり、機那サフラン酒本舗の吉澤仁太郎が建造したという、吉澤家のお墓です。墓石正面の大きな「涅槃臺」の書は石禅師の書です。中越地震のとき、定正院の墓地も、殆どの墓石が倒れる大きな被害を受けました。吉澤家の墓所も甚大な被害を受けましたが、その修復を示す、現当主名の銘板も見ることができます。近くのキツネの塑像もお忘れなく。

近くには、釜沢の「石彫の道」、「復元・石工の道」があります。

「復元・石工の道」が、定正院の奥、南蛮山の方に2キロほどのところにあります。つづら折りの道が続くようになって、道路沿いに石彫が現われ、数百メートル続きます。

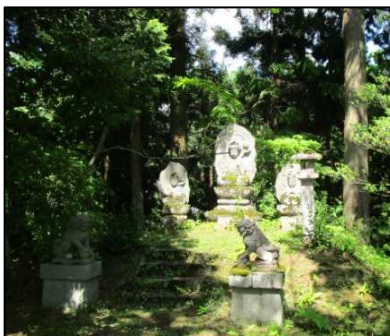
「石工の道」は、その「石彫の道」の一番終わりの方にあり、つづら折りの道をショートカットした、短い坂道に作られています。

その登り口の方に、元井達夫さんの作品「星との話」が建てられています。



定正院の方丈前の主庭は、禅宗寺院によくあるような、典型的な日本庭園の様相ですが、主庭の奥に広がるなだらかな丘状の庭は、不動明王や石仏も随所にあり、一般的な寺院の庭園と異なった風景です。そう、サフラン酒の庭にそっくりな雰囲気です。

定正院の庭の成り立ちに、仁太郎さんも、一時期でしょうが、多少関与していたのでは、と思っています。



補足 残った山本五十六「語録」

やって見せ
 説いて聞かせて
 やらせてみ

讃めてやらねば
 人は動かぬ

3. 石禅師とサフラン酒、略歴 のところで述べましたように、本当に多くの縁が重なり、山本五十六「語録」が残りしました。

橋本禅巖和尚は講話集のひとつ「正法眼蔵四摂法之巻摸壁」のなかで、山本五十六の言葉として、紹介しておられるということで、『讃めると云うことは、人をおだてるということではなく、育てて、共に喜ぶことなのであります。』

五十六さんの教育者としての面目躍如であり、今もなお消えぬ五十六人気を示すものであると思います。

この「讃めて」の真意を、きちんと伝えられることが大切と感じます。

石禅師関連人物図

二代駒形宇太七

初代駒形宇太七
法名 堅正

二代宇太七と
山本五十六

二代宇太七を
継いだ、弟・十吉

山本五十六景仰会
初代会長
の駒形十吉氏

吉澤家・
初代仁太郎

新井石禅師
曹洞宗教学部長
魚沼・雲洞庵、
足柄・最乗寺方丈を

橋本禅巖師
生涯 石禅師に師事
雲洞庵で教師

長岡・悠久山の
堅正寺初代方丈

十吉氏
長岡のアートにも
多大の貢献

堅正寺の寺号
無量寿経のなかの
讃佛偈の言葉

大光銀行の行名、
大智浄光 は、仏典観
音経のなかの言葉

菩提寺 定正院
曹洞宗

曹洞宗総本山は
永平寺と
総持寺

越後の禅の古刹・
雲洞庵

岸宇吉

宇吉の長男松（テキサス州オレンジ油田）

総本山総持寺

建功寺
本山近門寺院
枅野俊明住職

お墓の隣に、竹駒
稲荷と同じキツネ像

山本五十六
堅正寺・講堂で
記録された言葉

野本恭八郎

長谷川赳夫

庭園デザイナー
枅野俊明師
県立近美の
前庭を設計

市内町田の菩提寺・浄照寺の真宗も
意識つつ、若いころより曹洞宗の観音
経も読誦していたということ。